

資料論文（翻訳）

英国の大学における柔道の発展

伝統武道・スポーツ文化系 平沢信康*
同 濱田初幸*
同 プロジェクト研究員 田嶋靖子*

はじめに

本稿は、英国バース大学の柔道部長を務めるマイケル・カラン国際柔道研究者協会長が昨年6月に完成提出した博士論文の一部を抄訳したものである。下訳をプロジェクト研究員の田嶋靖子が担当し、柔道を専攻する濱田初幸が専門的立場から固有名詞等について補整を行い、平沢信康が総合的に監訳した。

論文の原題と日本語訳は、以下の通りである。翻訳したのは、同論文中の第2章第3節の第3項である。これによって、イギリスの大学柔道の歴史と発展を知ることができるが、特に20世紀前半の導入史が興味深い。

ELITE SPORT AND EDUCATION SUPPORT SYSTEMS:
A CASE STUDY OF THE TEAM BATH JUDO
PROGRAMME AT THE UNIVERSITY OF BATH

Chapter II Review of Literature
Original Historical Research into Judo
The development of judo in a UK University environment
Michael Jeremy Callan
A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy
University of Bath
School for Health
June 2008

*鹿屋体育大学，伝統武道・スポーツ文化系

エリートスポーツと教育支援制度 バース大学におけるバース柔道チームのプログラム事例研究

第2章 文献再考

第3節 柔道のオリジナルな歴史的研究

第3項 英国の大学における柔道の発展

柔道と教育との関連に関する議論に引き続いて、本節では1906年から2006年までの百年間に及ぶ英国における大学柔道の歴史を年代順に記述する。ここでは、バース柔道チームのプログラムに係る詳細な背景となる情報を示すが、それは読者にとって、前世紀における英国大学柔道の発展の文脈の中で、我々のプログラムの発展について理解することの助けとなる。

1906年、エヴリン・チャールズ・ドナルドソン・ローリンズは、トリニティカレッジに、柔道の研究のため柔術クラブを設立した。設立当初のクラブ員の人数は25名であった。トリニティはケンブリッジ大学のカレッジであり、ヘンリー8世によって設立された。これが英国における最も古い柔道クラブであると、柔道研究者のリチャード・ボーエンは2006年に主張している。トリニティカレッジの卒業生には物理学者であるアイザック・ニュートン卿や詩人のバイロン卿、テニソン卿もいた。映画「炎のランナー」(デヴィット・パットナム, 1981年)の中心的なシーンであるグレートコートランはトリニティの運動の伝統である。

ローリンズ氏は1884年に生まれ、イートンカレッジで学んだ。ジュネーブでの通訳勤務を経て、ケンブリッジ大学のトリニティカレッジへと進んだ。柔術クラブはペンブルックカレッジのJ.R.ヘザリントン氏の支援を受けた。トリニティカレッジのメッサーズ・ボウウェンス、スカネ、ネピア等もメンバー勧誘担当の役割を果たし、クラブを支えた。ヘザリントン氏は設立まもないクラブの名誉事務局長と会計係を務めた。ケンブリッジ柔道

の起源に係る情報は、エヴリン・ローリンズによって書かれたクラブの創立に関する書簡によるものである。書簡の複写は、E.C.D.ローリンズの甥であり、1941-2年の間オックスフォード柔道クラブの代表を務めたジョン・ローリンズ卿によって、現在のケンブリッジ大学の柔道クラブ部員に親切にも引き継がれている。その書簡によれば、クラブは急速に成長し、ローリンズは、間もなく谷幸雄やエイダ氏に日常的に指導してもらえるように依頼した。日本滞在中に柔術を学んだエドワード・バートンによって谷幸雄が1900年に英国に招聘されたことは知られている。しかしながら、エイダ氏についてはほとんど知られていない。

ローリンズは公職に就き、1937年12月11日、国王ジョージ6世は彼をボリビア共和国の総領事に任命した。

アーサー・C・ブーケ牧師(トリニティカレッジ)は第一次世界大戦後、初期(1920年代)から80歳代後半となった1969年まで柔道クラブ会長を務め、長期にわたりケンブリッジでの影響力を有した。ブーケ博士は神学部の教授であり、比較宗教学を専門とした。1941年に初版が出版された標準教科書の『比較宗教学』の著者でもあった。学術的な業績の他に、ブーケ博士は非常に現実的で、現世との接触を決して失わない、落ち着いた男性であったことが回想されている。

高等教育機関における柔道への最初の言及は、1920年3月10日の「武道会」の委員会議事録にある。午後7時半、イーストハムカレッジの要望により、谷幸雄と小泉軍治が柔道の演武を体操場にて行った。現在イーストハムカレッジはニューア

ムカレッジの継続教育の一部となっている。小泉氏は自身の武術団体「武道会」を1918年1月26日にロンドンに設立している。彼はヨーロッパにおける柔道の発展に根本的な影響を与え、英国柔道の父として度々言及される。

英国における初期段階の柔道は、アントワープオリンピックに行く途中の嘉納師範の訪問により大いに発展させられた。1920年7月15日深夜、嘉納師範は「武道会」で指導者となる會田彦一師範（四段）と共に到着した。W.E.スティアー氏と小泉氏はロンドンのウォータールー駅で彼らを迎えた。1920年7月30日午後6時半、嘉納師範と會田師範、アントワープオリンピックの日本人選手の歓迎会が行われた。スティアー氏は歓迎の意を表し、小泉氏はどのような経緯で會田師範が「武道会」の指導者になったかを説明した。小泉氏は実際には東京のYuye Yokoyama氏から資金援助を受けていた。歓迎会の後、嘉納師範と會田師範は柔の形を演武した。

1921年8月4日、トッテナムコートロードにあるインド学生クラブにおいて柔道教室が開校された。會田師範と小泉氏がコーチとなり、6名の学生が参加した。この柔道教室は、毎週月曜と木曜の午後3時に継続して行われた。

「武道会」の主任講師であった會田師範は、1921年8月29日ケンブリッジの友人を訪ねている。この訪問がトリニティカレッジの柔術クラブと何らかの関係があったかどうか、また、エヴリン・ローリンズ氏の書簡の中で言及されている會田師範とエイダ氏とが同一か否かは明確ではない。しかしながら、前述の通り會田師範は1920年までイギリスを訪れたことはない。

同年11月付けのオックスフォード大学チームとロンドン警視庁の写真のおかげで、オックスフォード柔道クラブが1926年に創設されたことが分かっている。

第一次世界大戦後、トリニティ柔術クラブは、ケンブリッジ大学の柔術クラブとして、1903-1905年、1919-1921年に大蔵大臣を務め1926年に

ノーベル平和賞を受賞したオースチン・チェンバレン卿の息子であるジョセフ・チェンバレンにより1926年に再開された。定期的な訪問や親善試合がクラブ同士で行われ、1920年代にはロンドン警視庁チームとのイベントも確かに行われていた。

フロイド（2006年）は、ケンブリッジ柔道クラブは、今日設立されている「武道会」の最初の加盟団体の一つであると述べている。しかしながら、1927年及び1929年の「武道会」の委員会議事録は、これに異議を唱えている。

「武道会」への加盟に関して初めて言及された議事録は、1927年1月25日午後5時半である。これは「武道会」が設立されておおよそ9年後のことである。委員会の会議進行は、クラブの議長パーシー・カニンガム卿が務めた。その議事録には以下のような記述がある。

「柔道を実践している組織が、日本の実例に従って門下生に段位を与える武道会に加盟できるかについて非公式な議論を行っている。いずれも行動はとられておらず、決定もされていないものの、方針は承認され、詳細に関する議論は次の考慮すべき事項を留保している」。

1927年6月22日、「武道会」の規則は以下のように加盟を容認するよう修正された。「総会はロンドンやその他、地方の柔道もしくは柔術クラブからの加盟申請を受け入れる権限がある」。1928年2月17日付けの議事録には5つの加盟クラブがあった。残念なことにクラブ名は列挙されていない。

1929年3月1日、ケンブリッジ柔術クラブからの加盟申請が「武道会」総会で審議された。議事録には以下のように記録されている。「書類を審議した結果、クラブの発展状況は申請を正当化するに足らず、現時点では加盟の承認を延期すべきである」。

ケンブリッジ大学柔道史初期のもう一人の重要人物は、J J コンシールである。彼は1926/7年から1957年11月に亡くなるまで指導をし、小泉軍治や「武道会」から度々助言を得ていた。彼の下で

練習をしていた競技者等は、ケンブリッジでの指導に着く前の彼の伝説的な経歴を思い出す。戦中、コンシールはフランス戦場警護隊で活動していた。敵陣の背後で生活し、活動していた彼は捕えられ、処刑日の前夜に逃亡した。彼の死亡記事には次のように書かれていた。「心温かく、ユーモアに富んでいた。しかし同時に、力強く、頭脳明晰で賢明であり、これらの彼の気質ゆえに、世代を超えて多くのケンブリッジの人々の指導者であり、友人であり得たのである。」彼の指導の下で、柔道の大学対校戦が始まり、柔道はケンブリッジ大学において、後にハーフブルー^{*1}の地位を得た。

1929年4月に、雑誌『武道会』が創刊され、C. B.G. ドブソン氏による「オックスフォードにおける柔道」という論説が掲載された。ドブソン氏は、大学代表柔術クラブは小泉氏や谷氏ら、あらゆる柔道の支流から指導を受けていたと述べている。その中で、1929年1月30日水曜日にオックスフォードのレディーマーガレットホールで行われて成功裏に終わった、小泉氏、谷氏、B.E. ウールハウス女史による柔道の講義や演武の様子に言及している。これに引き続いて、小泉氏がウールハウス女史に“five-irons”^{*2}を用いて攻撃する過程で、「極の形」が見事に演武された。更に柔道の講義や演武が1929年2月7日木曜日にオックスフォード柔術クラブにより行われた。

1929年7月26日の「武道会」議事録によると、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンとクィーンズカレッジ（11歳から18歳までの女子私立学校）にポスターが掲示されるべきだという提案が残されている。つまり、1930年までには少なくとも英国内の3つの大学、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学に柔道の授業があったことは確かである。

1930年2月には、ケンブリッジのギルドホールで大学対校試合が初めて開催され、ケンブリッジが優勝した。フロイドによれば、本試合は、日本以外の国で行われた初の公式試合であり、日本の

大使や「武道会」の代表、松平子爵によって成功が認められた。松平子爵は彼の名前が書かれたトロフィーを授与した。しかしながら、デイヴィッド・マツモトとミシェル・ブルースの米国における柔道の発達に関する報告によると、その時代よりも前にシアトル、ハワイあるいはカルフォルニアの道場間で試合を行っていた可能性が非常に高いと思われる。

1926年、秩父宮殿下が松平恒夫を伴って第9回「武道会」の演武に参加した。松平子爵は1929年に駐英大使として赴任し、「武道会」の代表としての地位を引き受けた。彼は日本からの贈答品として、オックスフォード大学とケンブリッジ大学に純銀のチャレンジカップを贈呈した。

雑誌『武道会』は、小泉軍治のオックスフォードチームとケンブリッジ大学の初の対校試合の回想を記録している。選出された6名のチームは、オックスフォードのコーンエクスチェンジに1930年2月27日午後3時に集った。試合は明確な2ポイント制の試合と規定された。結果は大将戦まで持ち込まれ、ケンブリッジ大学トリニティカレッジのE.B. マックドールがオックスフォード大学ペンブルックカレッジのF.H. ジーグララーに腕挫脚固を極めて10分間の戦いを制し、勝利した。

試合後、小泉氏はケンブリッジチーム全員とオックスフォードチームの4名を1人对10人の試合で戦わせ、彼は全ての相手を合せて3分45秒で投げた。

1931年、川石酒造之助が英国に到着し、1932年10月にオックスフォードで谷や小泉の代わりとして指導し始めた。川石は日本の早稲田大学の主将であり、1923年から米国のサンディエゴ州立大学およびコロンビア大学にて学んだ。川石が英国を去ったのは1935年のことであり、暴行の告発を受けて裁判沙汰になり、40シリングの罰金を科せられた後のことである。出発前に、彼はラルフ・モリス・オーウェンに初段を授与した。1930年、オックスフォード大学の新生であったモリス・オーウェンはバーリアルで動物学の本を読んでいた。

彼はオックスフォードクラブで初めての黒帯となった。

川石が去った後、オックスフォードには不幸にも常駐の指導者がおらず、それは指導を受けるのにロンドンまで出向かなければいけないことを意味した。このようなケンブリッジに有利な状況下で、この時代の対校試合は一方的な結果となった。13年間にわたりケンブリッジは英国内の公開試合で最も成功したチームであった。この業績の中には、「武道会」による公開試合である松井男爵杯での勝利も含まれている。

マンチェスター大学柔道クラブが、小泉軍治主宰の下、1944年に設立された。

英国柔道協会の設立をめぐる議論が、1948年7月24日土曜日にロンドン大学インペリアルカレッジ組合で行われた。会議は14時半に開催された。9名のうち3名が大学の代表であった。「リバプール大学バーバラ・ボール氏（後に博士）、ロンドンインペリアルカレッジG.ドーソン・グローブ氏及びヒルトングリーン氏、「武道会」ジョン・バーンズ氏、マイケルベル氏、フレデリック・コーエルト氏、小泉軍治氏、サウスシールズ柔道クラブを代表して「武道会」エリック・ドミニニー氏、ブリストル柔道会（後にロンドン柔道会）の代表としてスタン・ビッセル氏、マンチェスターY.M.C.A 柔道クラブは謝罪を申し入れてきた」（ポーウェン、1999年）とあることから、リバプール大学とロンドン大学のインペリアルカレッジは、英国柔道協会（BJA）の創設会議に代表として参加したということになる。

谷幸雄杯が、1951年に初めて、男子大学チームによって行われた。大学対校戦のトロフィーはロンドンの日本協会によって、初めて柔術をヨーロッパにもたらし、「武道会」の初代指導者であった谷幸雄（1881-1950年）を追悼して「武道会」に贈呈された。残念なことに谷はその前年に亡くなっていた。1951-52年の優勝校はリーズ大学であった。

当時ブリストル大学2年生で緑帯のトニー・ス

ウィニーの尽力により1957年12月バーミンガム大学で行われた英国大学柔道協会開催会議において、英国柔道協会（BJA）の全国協会として英国大学柔道協会（BUJA）が設立された。その後、BJAによって承認された。

バーミンガム大学のD.モス氏が議長を務めた。グラスゴー大学、キングスカレッジ、ロンドン、サウスハンプトン、ケンブリッジ、リーズ、オックスフォード、ブリストルそしてバーミンガム大学が代表を務めた。BUJAの初回選挙が行われ、リーズ大学のR.バリー・ウィリアムズが議長に、ロンドン大学のジョン・センプルが名誉幹事に、グラスゴー大学のフランク・デヴィッドソンが会計係に選出された。R.B.ウィリアムは当時三級保持者であった。

八段であり、前警視庁首席師範であった阿部謙四郎が1958年にケンブリッジの指導を引き継いだ。阿部は、小泉の英国柔道協会を脱退して、異なる基準に従い、英国柔道協議会（BJC）を創設したことで有名である。

英国大学柔道協会はBJAに加盟していたが、ケンブリッジは阿部の指導のもとに、BJCに傾いていった。この問題に鑑み、英国大学チームと委員会のために戦ってきたフランク・メーンは1962年に組織関係と指導者の変更を行った。

山田専太氏（柔道六段、合気道六段）が、1964年までケンブリッジの主任指導者を務めた。

1957-58年の英国大学選手権はバーミンガム大学の道場で行われた。決勝でリーズがグラスゴーを破り、3年連続で優勝した。1958年夏、BUJAはフランスのポーバロンで行われた第1回ヨーロッパ大学柔道選手権にチームを派遣した。チームには、ブリストル大学の学生であり、1964年の東京オリンピックで重量級の英国代表選手であったトニー・スウィニーも含まれていた。また、1958年には初のイングランドとスコットランドの大学対校試合が行われた。この試合はジョン・センプルによって企画調整され、タイム誌エデュケーショナル・サプリメント社によって後援された。

審判はロバート・スミス氏であった。

1958年8月、BUJAは設立後初めての学年度を迎えていた。創立者であるA.スウィニーは創立まもない組織の未来を憂い、将来の役員らに次のように提唱している。「今後2ヵ月の活動が、長くはないにせよ、我々の学生生活中的の大学柔道の将来を決定づける。そして私はあなた方が適宜対応してくれるよう望む」。

1959年から実施されるようになったBUJAの地方選手権は10人のチームがバーンズ盾^{*3}をかけて戦った。この大会はBUJA代表であるジョンG.C.によって提案された。バーンズ(1910-1997年)はEJUの終身副代表であった。1959年3月版の『柔道』によると、ジョン・センブルはBUJAに地域協会としての地位を与え、英国大学柔道協会と英国柔道協会の関係について議論している。2つの大学の夏期講習がG.グリーンソンの指揮の下、「武道会」にて企画された。

1962年10月、イングランドの大学対スコットランドの大学の試合がグラスゴー大学にて行われた。この試合には、スコットランドの西や東のチームも参加し、また、受け身、乱取り、連絡変化技など様々な実践が見られた。大学チーム選手権はラフバラ大学が辛うじてロンドン大学を破り、優勝した。

1964年の英国大学選手権は純粹に、無差別級の5人からなるチーム行事であった。

大会はロンドン大学の学生クラブで行われたが、ホームチームは決勝戦でリーズ大学に敗れた。グラハム・ホーリングはリーズチームのキャプテンであり、オランダのデルフトで行われた第2回ヨーロッパ大学柔道選手権で金メダルを獲得した。また、銀メダルと銅メダルも英国の選手が獲得した。第2回大会がヨーロッパ大学柔道選手権の最後の大会となったため、ホーリングは「無敗のヨーロッパ大学チャンピオン」であり続けた。

第1回世界大学柔道選手権はチェコスロバキアのプラハで1966年に行われた。1チーム11名の選手から成り、英国は銅メダルを獲得した。この大

会は、国際大学スポーツ連盟(FISU)によって主催され、したがって英国が参加するためにはBUSF(英国大学スポーツ連盟)の支援が必要であった。英国の中量級は、モデリーテクニカルカレッジのリチャード・バラクロフ二段であり、彼はその後、世界における数々の大学柔道選手権の監督や、英国柔道協会の副代表も務めた。1967年世界学生競技大会は東京で開催された。英国は2つの銅メダルを獲得した。開会セレモニーの英国チーム旗手はメンジース・キャンベルで、彼は陸上競技で2つの銀メダルと1つの銅メダルを獲得した。メンジース・キャンベル卿は英国自由民主党の党首に選ばれた。

60年代半ば、BUJAはBJAの承認の下、学年度初期に人材採用を目指す試験的な「開発計画」を実行した。この試みは、急激にBJAのメンバーを増やし、国際大学プログラムへの資金提供の一助となった。1966-67年の学年度には、ロンドン大学カレッジの423名を含めて、BJA追加メンバー1209名が入会した。1967年ロンドン大学柔道クラブの広報担当によると、「何千人もの学生が柔道を練習している」と語り、国内で最も大きな大学スポーツクラブであると自称した。また、その約2年前には、女子柔道の需要に応えるためロンドン大学女子柔道クラブという別のクラブを発足させた。1968年に世界大学柔道選手権がポルトガルのリスボンで開催され、英国は銅メダルを獲得した。1969年、オックスフォードで初めてブルー^{*4}を受賞したのは聖エドモンドホールで物理学を学んでいたボブ・ダービーであった。

1970年10月頃、バース大学は南部大学柔道チーム選手権大会を主催した。この選手権は、バース大学の当時のコーチであったフランク・スミスやデヴィット・ハットン等によって準備された。彼らはまた、バースのパラゴン学校で練習していたという事実のおかげで、地元ではパラゴンクラブとして知られているバース柔道クラブのコーチでもあったデヴィット・ハットンは約一年前に、初代バーススポーツ長であるトム・ハドソンに任命

を受けた。

選手権ではピーター・サッチャー、イアン・トラバース、マーガレット・レーション、ロイド・ロバーツの4名の地元選手が観客として出席した。しかしながら、複雑で混乱した組合せ表の記録による雑然とした大会の性質と、大会の結果の確保を巡る議論により、おおよそ2時間後、トム・ハドソンはピーター・サッチャーに歩み寄り、手伝ってくれるよう依頼をした。

大会は中断し、メッサーズ・ハットンやスマスは会場を去り、サッチャー氏は自分が選手権を再度調整する方がよいかどうかを出席者に尋ね、拳手による採決を行った。提案は可決され、組合せ表は書き直された。大会はサッチャーとその補佐役等による仲裁、進行の下、前進した。

選手権の後、ハドソンはサッチャーを大学の上級ダイニングルームでの食事に誘い、大学柔道クラブの運営を引き継いでくれないか依頼した。当初、サッチャーは申し出を断っていたが、ハドソンはとても粘り強く、その後の幾回にもわたる会合の後、1970年11月にサッチャーはついに受諾し、その後29年間バース大学柔道コーチを務め続けた。その当時、バース大学柔道クラブは南館の学生食堂でトレーニングをしていた。これは、スポーツ会館が開設される以前のことであり、その後ファウンダーズ総合施設として知られるようになった。

1970年代には、大学選手権はロンドンのクリスタルパレスナショナルセンターで行われ、BUJAの行事はBUSF（英国大学スポーツ連盟）選手権として公認された。1972年には英国大学スポーツ連盟は世界大学柔道選手権をロンドンのクリスタルパレスで主催した。選手らは、現在はグリニッチ大学の一部であるアベリーヒルカレッジ近くに滞在した。

1974年の世界大学柔道選手権はベルギーのブリュッセルで行われ、総勢26カ国が参加した。銅メダルを獲得したブリアン・ジャックも戦った。ジャックは10年前には東京オリンピックの英国代表選手であり、英国学生チャンピオンの座に君臨してい

た。ジャックは人を魅了することで知られ、「武道会」のロイ・インマンを全英オープンの決勝戦で破った。その年の団体トーナメントのバーンズ盾は、スコットランドを決勝で倒し、オックスフォードとケンブリッジの混合チームが獲得した。

第1回英国学生スポーツ連盟による公式女子柔道選手権大会が、1977年に開催され、2つの体重別階級のみが設けられた。英国大学選手権では、マンチェスター大学が谷幸雄杯のトロフィーを勝ち取り、25番目のトロフィー保有者となった。

1978年、世界大学柔道選手権はブラジルのリオデジャネイロで開催された。英国チームには、71キロ以下級で戦ったピーター・ブレウエットも含まれていた。ブレウエットは後に「武道会」の主任指導者に任命されることになる。その他の英国代表選手にはジョン・ヒンドレーもいた。ヒンドレーは86キロ以下級で戦い、ミシェル・ブルースに負けた。ブルースは現在ボルドー大学の教授である。無差別級では、ヒンドレーは山下泰裕に敗北した。山下はこの選手権で優勝し、その後IJFの教育・コーチング理事を務めた。山下については、彼の203連勝はもちろんのこと、4つの世界選手権でのタイトル獲得と1984年のロサンゼルスオリンピック大会での金メダル獲得も含めて、有名である。英国大学チームも、1978年にバーススポーツセンターで行われた国別選手権大会に出場した。チームの宿泊施設はバース大学であった。

1980年の世界大学柔道選手権はポーランドのブロッラフで開催された。英国のデヴィット・ランセは銅メダルを獲得した。同年2月、ランセはBSF個人選手権65キロ以下級で、バース大学のウィリアム・ジャクソンに勝利した。ジャクソンはその後、階級を71キロ以下級に変更し、世界大学選手権の英国チームの代表権を得た。著者はこの選手権で、60キロ以下級の英国代表であった。

1982年の世界大学柔道選手権はフィンランドで開催された。学生チームは3月の国別チーム選手権大会で戦い、ポーツマス技術専門学校のR. ウィリンガムが95キロ超級の代表となった。ボブとい

う名前で良く知られ、世界柔道マガジンを設立し、国際柔道連盟の公認写真家でもある。

1984年、世界柔道選手権大会はフランスのストラスブールで行われ、1985年のユニバーシアード柔道競技大会は日本の神戸で開催された。これらの大会では公開競技としての柔道が含まれていた。1986年世界大学柔道選手権は再度ブラジルのリオデジャネイロで開催された。その年に行われたBUSF選手権大会78キロ以下級の金メダリストは、エリック・ジョイスであった。彼はバース大学の経営学の学生を経て、下院議員となった。1988年の世界大学柔道選手権大会はグルジアのトビリシにて開催され、第6回正力松太郎杯国際学生柔道大会が東京の日本武道館で開催された。1990年、世界大学柔道選手権大会はベルギーのブリュッセルで行われた。オックスフォードとケンブリッジ大学は日本への遠征を合同で企画した。

1994年の世界大学柔道選手権大会はドイツのミュンスターで実施された。翌1995年の大会は日本の福岡で開催され、組織委員会から任意的なスポーツとして紹介された。英国のミシェル・ホルトは銅メダルを獲得した。

世界大学柔道選手権大会は1996年にはカナダのモントリオールで、1998年にはチェコスロバキアのプラハ、1999年の世界大学競技大会はマヨルカ島のパルマで開催された。1999年3月、東京大学柔道部の部員が英国遠征の一部としてオックスフォードとケンブリッジの柔道クラブを訪問した。オックスフォードとケンブリッジ大学のクラブが合同で、ロンドンのポールモールにて夕食の機会を設けた。そこには、デヴィット・ウォーターハウス教授、チャールズ・パーマー大英帝国四等勲士(OBE)、トレバー・レグット氏、リチャード・ボーウェン氏、クインズベリー侯爵(彼の先祖はスポーツボクシングの規則を確立した)が日本の駐英大使である林貞行氏を伴って参加した。

1999年、バース大学は能力の高いフルタイムの柔道コーチを任命し、これは英国大学では初めての事であった。採用された志願者はロイ・インマ

ン八段であった。英国女子チームの前監督として、インマンは8回の世界チャンピオン、13の世界タイトル、そして6つのオリンピックメダルの獲得を成し遂げた。インマンの任命と共に、大学は柔道を注目スポーツとして、高度なスポーツと学問の結合を促進する機会である新企画の「チームバース」スポーツプログラムに追加した。1992年、インマンは英国勲位を英国女王から授かった。20年前の1970年代初頭、インマンは、1964年にオリンピックチャンピオンとなった岡野功によって設立された私塾の「正気塾」で柔道を学び、そこで岡野が興味を持っていたクリフ・リチャードの音楽を共有するようになった(ロー、2007年)。その後、21世紀のバース大学では、クリフ・リチャードの楽曲が、現在でも打ち込み稽古時のバックグラウンド・ミュージックの一つとなっている。

2000年の世界大学柔道選手権大会はスペインのマラガで開催され、2001年の大会は中国の北京で行われた。メダル獲得者の中には、バースチームのジョージナ・シングルトン、カレン・ロバーツそしてケイト・ホーウェーが含まれていた。2002年には世界大学柔道選手権大会がユーゴスラビアのノビサドで、2004年にはロシアのモスクワで、2003年の世界大学選手権は韓国の大邱市で開催された。

ロイ・インマンによって導かれたプログラムは英国大学柔道を独占し、2006年、バース大学チームは男女共に選手権大会で優勝した。また、年次BUSAX行事において、個人の部で5つのメダルを獲得した。バッテン(2006年)はバースを訪問し、「なんと親しみやすい雰囲気、そしてなんと専門的な取組み!」と評した。

2006年の世界大学柔道選手権大会は韓国の水原(スウォン)で実施された。同年6月8日、トリニティカレッジの柔術クラブ創設100周年を祝う夕食会が行われた。招待客の中には外科医で副提督のジョン・ローリンズ卿がいた。彼自身はオックスフォード大学柔道部の代表であったが、彼の叔父は約100年前にトリニティカレッジにクラブ

を創設した。

これまで見てきたように、英国大学柔道には長い歴史がある。

柔道の国内運営組織である英国柔道協会は、実際には、大学の領域の中で設立されたのであった。以上、英国大学柔道の発展を年代順に記録してきた。詳細な説明は、文献への貴重な補強となるであろう。

以上は訳者の問い合わせに対する著者からの電子メールでの回答である。

なお、人名に「氏」が付されている者と付していない者とが訳文中に混在しているが、原文中における敬称 (Mr.) の有無を忠実に訳出したもので、他意はない。

紀要に訳出掲載する許諾は原著者から得ていることを、念のため付記する。

訳 者 註

*1. *4 Half Blue, Blue：オックスフォード大学とケンブリッジ大学に起源を持つ運動競技表彰制度の地位の一つ。「フルブルー」と「ハーフブルー」とがある。両大学のボートレースにおいて、オックスフォード大学の選手が濃紺と白のストライプが入った運動着を着用し、ケンブリッジ大学の選手が薄青色のリボンを船首に付けていたことから、オックスフォード、ケンブリッジ大学の「カラー」が生まれたと言われる。両大学においては、伝統的価値などを基に運動競技ごとに、フルブルー、ハーフブルーの地位を与えるか否か判断している。その基準に従い、該当するスポーツで優秀な成績を修めた選手を表彰する。現在は、英国およびオーストラリアの他大学においても、独自の基準を設けて採り入れられている。

*2 five-irons：ゴルフクラブの「5番アイアン」のことであり、「極の形」の演武の際に刀の代わりとして使用されたと考えるのが妥当であると推測される。

*3 the Barnes Shield：ジョン・バーンズ (John Barnes) 氏にちなんで設けられた優勝盾。バーンズ氏は数年間「武道会」の会長を務め、1948年に行われたヨーロッパ柔道連盟の会議に参加した。また、東京で1956年に初めて開催された世界柔道選手権大会の英国チーム代表の団長であった。